

【研究主題】

自ら課題を見つけ、主体的に追究し、自分の生き方を考えていこうとする子供の育成を目指す「総合的な学習の時間」はどうあればよいか。

富山市立寒江小学校 教諭 笹原克彦

- 1 単元名 World Wide な Wa たしたちになろうプロジェクト（WWW プロジェクト）
- 難民の食とくらしを考える -

2 単元について

単元構想の概要

学年の発達段階、教科学習との関連、総合的な学習で高めたい力をふまえ、今日的な課題性（国際理解）を含む内容が望ましいと考え、「食」をテーマとする国際理解のカリキュラムを構想し実践した。1学期は、「食べたことのない世界の味を味わおう」をテーマとし、世界を広く概観した。2学期は、「難民のくらしと食を考える」をテーマとし、世界の切迫した問題について深く学習できるようにした。

そして、研究主題と関連させて、次のような支援を行っていくことにした。

- ・ 子供が主体的に課題を見付け追究していくための体験を取り入れた学習過程の工夫
- ・ 子供の追究を支援する、多様な調べ学習の保証
- ・ 子供の追究を深めたり揺さぶったりするための自己評価、教師評価

「総合的な学習の時間」を通して伸ばしたい力の明確化

（表1）総合的な学習の時間に伸ばしたい能力

	5年生で主に身に付けたい力	6年生で主に身に付けたい力
課題設定の能力	体験活動から次第に課題を見つけていくことができる。	課題意識をもちながら体験し課題を焦点化することができる。
問題解決の能力	自分や友達の調べたことを、相互に関連づけながら、発展させて考えたり新しい考えを見つけたりすることができる。	
表現する能力	見つけたことや自分の考えを友達に伝えるために、適切に書いてまとめたり話したりできる。	友達が調べたことを読んだり話を聞いたりしたことから、自分の考えを見直し、つなげて発言できる。
情報活用の実践力	目的に応じて適切な方法・手段を選択しながら情報を収集できる。	
自己を振り返る力		自分のくらしを振り返り学習したことと自分がどう関わっているかを考え直すことができる。

この単元で期待する子供の伸ばしたい力を以下のように明確にした上で、単元計画を構想した。

本校では、「総合的な学習の時間」に身に付けるべき能力として、

- ・ 課題設定の能力
- ・ 問題解決の能力
- ・ 表現する能力
- ・ 情報活用の実践力
- ・ 自己を振り返る力

の5つを挙げている。これら5つの力を、学級の子供たちの実態に合わせ、表1のように具体化した。

全体計画と学習内容

子どもに高めたい能力と学習内容を基に、「WWWプロジェクト」の全体計画を構想した（図1）。単に調べ活動を進めるだけでなく、課題をつかむ段階、課題を広げたり深めたりする段階、活動を振り返る段階など、随所で体験活動を取り入れ、子供たちが意欲を持続させながら、主体的に取り組めるようにしようと考えた。



図1 平成15年度第6学年寒江っ子学習の年間計画

1学期は、「食べたことのない世界の味を味わおう」をテーマに、世界にある国々やそれぞれの国での食とくらしについて、幅広く学ぶことができるようにした。「食べたことのない」と条件付けることによって、アジアやアフリカ、中南米など、これまであまり意識してこなかった国々に、子供たちは目を向けていくことができると考えた。

また、「食」には、使われている食材の種類や調理法だけでなく、その効能や、地域の産物・気候との結びつきなど、課題を発展させながら追究してける可能性がある。実際に子供たちは、単にメニューの中身を調べるだけでなく、自分たちの生活との結びつきという視点で調べることができるようになっていくと考えた。

さらに、2学期には、

「難民のくらしと食を考える」をテーマに学習を進めようと考えた。「食とくらし」という視点から、難民たちの生活を深く考え、自分たちのくらしと結びつけてとらえることができるだろう。その結果、世界には様々な国々があり、そこには様々なくらしがあり、今も過酷な生活を強いられている人々がいることに目を向けていくことができるだろう。

1学期は、広く浅く世界を概観する内容を、2学期は、深く世界の問題を考えて学習する内容を、構成することによって、子供たちは自分のくらしを比較しながら世界の人々のくらしに対する関心を高めようと考えたのである。

3 子供が主体的に課題を見付け追究していくための体験を取り入れた学習過程の工夫 体験活動の学習過程における役割の明示

「総合的な学習の時間」が単に体験することを目的としているわけではない以上、何のために体験活動を取り入れるかについて、教師が明確な意図を持たなければ、あまり意味のある学習にはなり得ないと考えられる。そこで、活動に対する適切な場面や目的を考えながら実践を進めることによって、学習に対する視点を広げたり深めたりしながら児童の力を高めることができると考えた。本実践では、体験活動の役割として以下の3点を考えた。

ア 課題を見付けるための体験

学習テーマの中から、自分なりの課題を見つけるためにとりあえず体験する段階である。児童の生活エリアにあることが、そのまま身近な課題となるわけではない。最初の段階では、児童の「なぜ」「どうして」を引き出し、それを課題意識へと高めるきっかけとしての体験活動を構想することが大切である。

イ 課題に対する視点を広げるための体験

学習がある程度進んできた段階で、学習の視点を広げたり切り替えたりするためのきっかけとなる体験活動である。自分の学習を振り返り、より深く多様な見方、考え方、調べ方による学習へと進むことが期待できる。

ウ 自分の取り組みを見直し、自己の生き方を考える契機とするための体験

まとめの段階で、自分の学習した成果を振り返り、自己の生き方を考えるきっかけとなる体験活動である。

体験活動の実際

ア 課題を見つけるための体験

6年生になった児童に、世界の国々に対する知識やイメージについてアンケートしたところ、断片的で不正確な情報しか持たないことが明らかになった。そこで、世界を概観し国際理解学習に対する意欲を高めるため、タイやベトナムなど



レシピを見ながら調理する子供



一口ずつ取り分けた初めての料理

これまでに食べたことのない地域の料理の味や食感にふれる活動を実践した。

ライスペーパー、ライスヌードル、スパイス、魚醤等の食材や調味料を使って7種の料理をレシピ通りに作り「一口ずつ」試食するという体験学習を実施した。初めて口にすると味や食材から感じた疑問を基に、追究を進めていった。単に「外国の食について調べよう」と投げかけるのではなく、実際に口にすることによって、自分たちが日常食べているものと比べ、相違点や

共通点に目を向けるきっかけとなった。「一口ずつしか食べられない」ということで、子供たちは感覚をとぎすませて、味の特徴を見つけるよう努めていた。

一口ずつ試食した後に、子供たちが最初に抱いた感想は、自分たちが普段食している味とのちがいに対する驚きである。そこから、こういう違いはいったいどこから来るのかという疑問へとつながっていった。その疑問を解決する過程で、次第に食と産業、習俗、宗教、自然とのつながりなどに関心を持ち、課題を見つけていった(表2)。

「食」は、日頃の自分たちの生活の中にありふれたことだが、身近にあるからといって、そのまま課題になるわけではない。課題として「食」を意識化するためには、「食べたことのない」味や食材を体験することは、大変有効であった。共通する体験で感じた思いがベースにあるので、話し合い活動では、友達の調べたことを自分の調べたことと結びつけてとらえ、自分たちのくらしとの相違点や共通点に気づく子供の姿も見られるようになった。また、食を通して世界の国々を概観することによって、自分たちと違った文化や食生活であっても、それらを肯定的に受け入れることができた。

(表2) 追究後のまとめにおけるテーマ(複数選択)

食材と健康との関連	5
日本との違い	4
味の特徴	4
地域性による味のちがい	3
さまざまなメニュー	3
産業との関連	2
料理の歴史	2
宗教との関連	1
合計	24

イ 課題に対する視点を広げるための体験

1学期の学習を通して世界の食とくらしの豊かさに気付いた児童に対して、難民のような社会的に恵まれない人々の存在など、より深い視点から課題を見つけて追究できるようにしたいと考えた。

そこで、国連難民高等弁務官事務所がインターネット上に公開している難民食を3日間分の昼食とする体験を行った。使う道具も最低限とし、かまどを使って火をおこすなど、できる限り難民キャンプの生活に近づくようにした。標準の食材では、味付けは単調で、すぐに空腹を感じるなど、厳しいくらしを想像するに足りるものであった(表3)。この体験を通して、「このような厳しいくらしを強いられている人々とはいったいどういう人々なのだろうか」という、子供たちに共通する思いが生まれ、そこから追究を深めていくこととなった。

「3日間の難民の食事体験」をすることによって、自分たちとは全く違った厳しいくらしを強いられている人々がいることを、実感を伴って理解することができた。そこから課題を発展させ、学習を進めることができた(表4)。

追究を進めていくうちに、児童労働の実態、対人地雷問題など、追究課題は次第に細分化し、深化していったが、最初の体験で感じたインパクトが、追究の意欲を支えたと考えられる。

(表3) 難民食体験後の子供たちの感想(抜粋)

- ・ 少ない材料で調理して食べたけど薄い味でした。3日間で限界だなと思いました。難民キャンプのくらしを考えると、とてもとてもつらすぎると思いました。(D児)
- ・ 難民のくらしは、食べ物を自分の食べたいだけ食べられないと思うので、つらそうだ。これは、わたしが食べたときに少ないと思ったから。(K児)

(表4) 難民食体験後の子供たちの課題(複数選択)

・ 食事以外の難民のくらしはどうなっているのか	9
・ 難民はどの国、地域にどのくらいいるのだろうか。	8
・ 難民を支援しているのはどのような団体か。どう支援しているか。	6
・ どうして難民が発生するのか	2
合計	25



グラウンドに作ったかまどで調理

ウ 自分の取り組みを見直し、自己の生き方を考える契機とするための体験

難民の生活を取り入れた劇を演じた。台本を子供たちで構想し、劇を



学習発表会で演じた劇

作っていく過程で、実際のくらしはどのようなものなのか、そこでくらす人々はどのような気持ちでいるのかを、具体的に想像しながら演じることができた(表5)。

3学期には、これまで学んだ成果

をまとめ、4、5年生や保護者を対象にプレゼンテーションする場を設定した。これまで難民について調べたことから自分たちにできることは何かを考えるようになり、支援の目

(表5) 学習発表会後の子供たちの感想(抜粋)

- ・ 調べると、いつも地雷で手や足をなくしている人が必ずでていてとてもかわいそうだなと思いながら見ていました。食べ物が少ししかないのに取っていく人もいるし、テレビでも同じ国の同士で殴り合ったり殺し合ったりするニュースを見ます。日本はとてもよいくらしをしていて難民の人たちとわたしたちは大違いだなと思いました。(I児)
- ・ 難民がこれ以上増えないように、わたしたちができることは何かを考えていけばいいと思います。(D児)
- ・ 難民のことを調べる前はかわいそうと思っていたけど、どんどん調べていくうちに、難民の子供たちは恵まれていないけど、強く働いていたりして、かわいそうという気持ちからえらいなという気持ちに変わってきてもっといろんなことを知りたいと思いました。(S児)

的や方法を明らかにしながら、訴えることができた。単に募金を働きかけるだけでなく、難民のように苦しい生活を強いられている人々の存在をできるだけ多くの人に伝えていくことの大切さを感じ取っていた。

国際理解の学習では、実際に現地へ行って体験することは不可能であるが、こうした疑似体験を重ねることによって、子供たちの追究は、単に言葉だけでなく実感を伴ったものになっていった。追究の中で見つけた考えを他と比較したり、自分の追究について考え直したりする体験活動を取り入れることによって、考えを深め自分のくらしの中に生かしていこうとする態度を養うことができた。

4 子供の追究を支援する、多様な調べ学習の保証

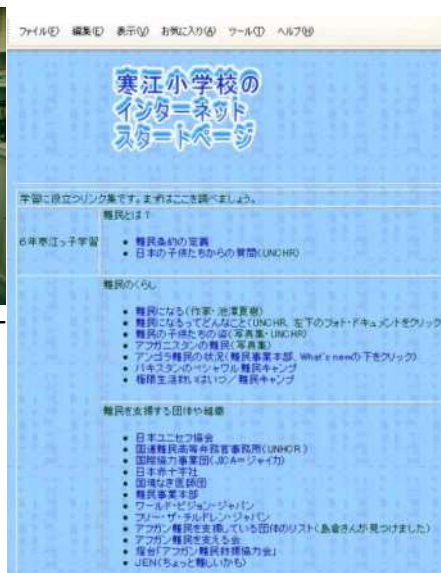
追究の過程では、子供たちが目的とする情報に効率よくふれられるように、基本となる情報が載っていると考えられる Web サイトを教師があらかじめ選択し、リンク集を開設した。学校図書館司書と



図書館司書が開設した国際理解コーナー

図書室に「国際理解コーナー」を設け、学習内容にあわせて基礎となる関連書籍を集めた。図書館司書には富山市立図書館、富山県立図書館から関連図書を借り出してもらい、コーナーに並べることによって、書籍資料の充実を図った。発展的に課題を広げている子供は、コーナー以外から必要な書籍を見付けたり、知りたい情報を得るために、キーワードで目次や索引を検索するなど、インターネットの活用と連携して、調べる力を高めている子供の姿が見られた。また、電話や電子メールによる取材ができるように、コーナーを設けた。マナーを意識して取材ができるようコーナーには文例を置いたり、あらかじめ質問することを整理しておくために原稿を書くよう指導したりした。

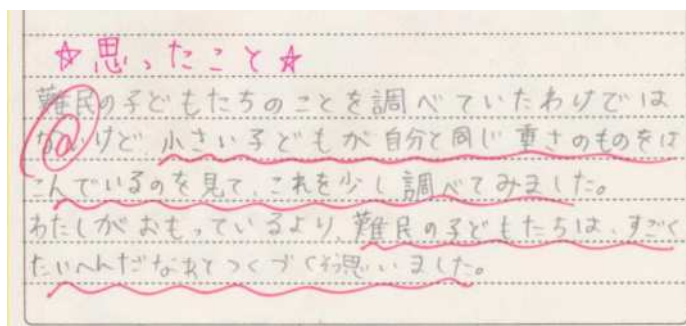
S2 児は、食事体験を終えた段階で、難民のくらしはどのようなものであるかを、使っている道具や服装などから明らかにしようと考えていた。しかし、図書館に設けられた国際理解コーナーでの資料から、難民の子供たちが自分よりも大きな荷物を運びながら働く姿に心を動かされ、自分たちのくらしとのあまりの違いに大きな驚きを感じた。そして、難民の子供たちはどのようなくらしをしているかを課題に追究を深めていった。S2 児の心の底流にも、なぜ粗末な食事で過ごさなければいけない難民のような人々が存在するのだろう、という強い思いが流れている。それ故、子供たちがその願いに迫るために課題を変えていくことを認めることにした。主体的に取り組める学習環境の中で、自分の感動を大切にしながら、次第に自分の考えを焦点化していく S2 児であった。



学校ホームページ内に開設した学習ページ



体重より重い水を運ぶ子供



S2 児のノートから

5 子供の追究を深めたり揺さぶったりするための自己評価、教師評価

単元全体を見通した教師用の評価カードを活用した。単元全体の評価基準をあらかじめ洗い出して一覧にすると同時に、時間毎に1～2の項目を重点を決めて評価し継続していくことで、一人一人のあゆみを把握し、適切な助言・指導ができるように努めた。課題に対して適切な資料を見つけない児童に対して、次時の始めに適切な書籍を提示するなど、子供の学習を促し意欲を持続させながら学習を進める支援となった。

また、毎時間ごとに自己評価カードを活用し、子供一人一人が、どのような意識を持ちどのように学習を進めているかを振り返ることができるようにした。

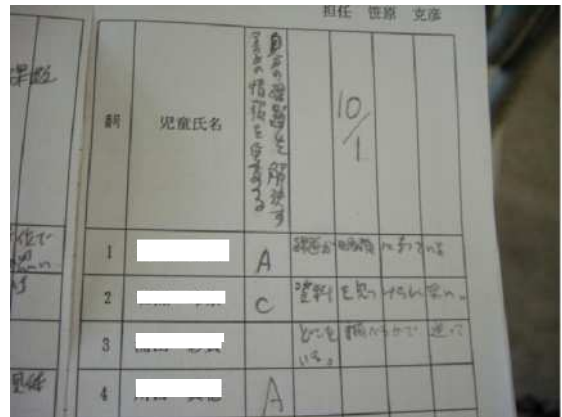
また、毎時間ごとに自己評価カードを活用し、子供一人一人が、どのような意識を持ちどのように学習を進めているかを振り返ることができるようにした。

評価表

番号	児童氏名	課題設定	問題解決	表現	情報活用	自己を振り返る
		難民の人々の食生活を食べる体験から、自らの問題を挙げて調べ、課題を見つける。難民の食生活を味わい、もっと知りたいと思うようになった。	難民のくらしや援助活動について知るために必要な手段や資料を収集、選択してまとめる。自分の課題を解決するための手段を選択し、目通しを持ち必要な情報を収集する。	難民のくらしや援助活動について知るために必要な手段や資料を収集、選択してまとめる。自分の課題を解決するための手段を選択し、目通しを持ち必要な情報を収集する。	難民の生活や文化は二語二語の援助活動について調べたことを、分かりやすくまとめて伝えたい。	インターネットなどのメディアを活用して、難民キャンプの生活や援助の実態を調べ、自分の主張が伝わるように、メディアを活用し資料を提示し、から話すことが出来る。難民の生活や文化は二語二語の援助活動について調べたことを、分かりやすくまとめて伝えたい。
1						
2						
3						

適切な助言・指導ができるように努めた。課題に対して適切な資料を見つけない児童に対して、次時の始めに適切な書籍を提示するなど、子供の学習を促し意欲を持続させながら学習を進める支援となった。

また、毎時間ごとに自己評価カードを活用し、子供一人一人が、どのような意識を持ちどのように学習を進めているかを振り返ることができるようにした。



1時間に1項目の評価

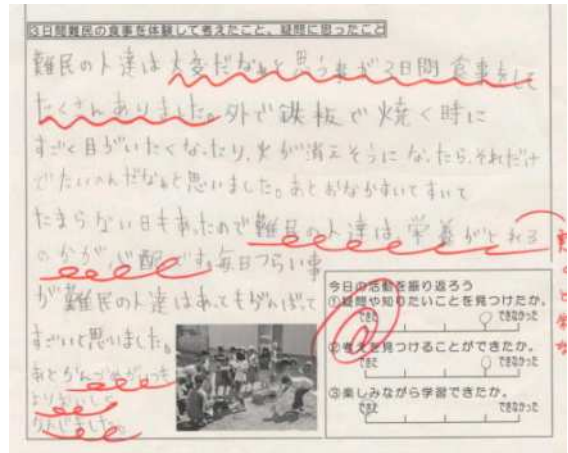
6 まとめ

- 今まで食べたことのない世界の料理を作り、一口ずつ試食するという体験によって、自分たちの食との違いを基に課題を見つけ、世界の人々のくらしと食のつながりという視点から、意欲的に追究できた。3日間の難民食体験を行った体験から「このような食でくらす人々がなぜ存在するのか」という難民への思いが強まり、そこから課題を見つけて追究することができた。

- 課題の見直しを認めてたり、学習内容にあわせたインターネットリンク集や学校図書館司書と連携した書籍資料コーナーの活用したりするなど、多様な学びの自由を保障することによって、子供たちは主体的に追究を進めることができた。

- 学習発表会で難民の生活を劇化したり、調べたことを下級生や保護者にアピールしたりするなど、学習の成果を発表していく過程で、追究の見直しが起こり、自分たちと世界との関わりを考えるようになった。

- 評価基準を明らかにし、1時限につき1観点に絞りながら、子供の追究を教師がとらえることによって、子供の追究を促す適切な支援を行うことができた。子供たち自身も、自己評価カードに記入しながら、自分の歩みを振り返ることによって、自分の追究を見直していった。



短時間でできるように工夫した自己評価